

# 富山丸慰霊塔 碑文

昭和十九年六月三日大東亞戦争参加のため鹿見島、都城、熊本に編制せる独立混成第四十旅団及び四團にて編成せる独立混成第四十五旅団と基幹とする兵員四千余名は輸送指揮官柴田市松大佐指揮の下に六月二十四日鹿見島港にて富山丸に乗船せり。然るに敵の潜水艦は山川港に出没して、我船団の行動を監視しつつありとの情報に接するも、我が方の状況停滞すると許さず六月二十七日沖繩に向け出港せり。

翌二十八日午後四時古仁屋港に入港す。同港にて荷揚予定のガソリン千五百本は積載のまま出港、他の艦船と三従梯団の船列にて徳之島龜徳港沖二哩と航行中、敵潜水艦の発射せる魚雷は富山丸の船首に命中す。同襲入れず第二第三の魚雷は富山丸の機関部とガソリンに命中し、猛烈なる爆風と火焔は天を覆ひ富山丸は瞬時にして撃沈せり。

柴田大佐以下三千六百余名の兵員と四十七名の富山丸乗組員は舟と運命を俱にし、辛うじて身を海中に投ぜし兵員も、燃えさかるガソリンの炎にあふられて、火傷するあり傷死するあり、戦場の常とはいへ、凄惨の極みにして焼熱地獄の中に陛下の万歳と唱へ、無念の涙とのみつつ散華しゆく諸兄の神々しき姿は現として髣髴たり。

本年二十周年を迎へるに当り各界各位の厚意により、諸兄が眠る海底と眼下に見降ろす景勝の地とトして、此の地に慰霊塔を建立し、諸兄の例と慰めむとす。

諸兄よ翼くば徳之島の山懐に抱かれて、龜徳沖に永へに神安らかに静まり給らんことを。

昭和三十九年六月二十九日

建設者

三角光雄

徳之島町

# 瀬戸内町古仁屋の供養塔 弔魂の辞

昭和十九年六月二十九日午前七時二十五分、八千屯の輸送船富山丸は沖繩守備に向ふ四千余名の将兵と軍需物資を満載して奄美大島の徳之島龜徳沖と南下中、敵潜水艦の魚雷をうけ瞬時にして沈没し、三千七百六十三名の将兵と七十五名の船員は富山丸と運命を伴にして壮絶な戦死を遂げ寄しくも難と逃れし将兵も富山丸に積載した千五百本のドラム缶のガソリンが浮上して次々に爆発炎上し、猛火は海面を覆ひ忽らにして阿鼻叫喚の巻化し、陛下の万歳と三唱する者、妻子の名前と呼ぶ者焼死するあり、火傷するあり其の惨状は正に凄惨壯絶の地獄絵図であった。

この事態を望見せし古仁屋の町民は、直ちに船を仕立てて救援に向ひ、やがて僚船や救援に赴いた船から運ばれた遺体と負傷者は数知れず古仁屋の町は大騒ぎとなり、突然の出来事に古仁屋町は其のなすべし処置に迷ひ遺体はトンキヤンの海岸にて懇ろに荼毘に付し負傷者は取り救えず聖域の森の下にある古仁屋高等女学校に収容して古仁屋国防婦人会は給出で負傷者の看護に当り医療品は欠乏し各部落に芭蕉の葉と豚の脂の供給を依頼、シーツ代わりに芭蕉の葉と板の間に並べて其の上を負傷者と寝かし皮膚の剥げたところに豚の脂を塗り懇命に看護に努めたが其の甲斐もなく無惨な姿で次々に亡くなってゆく将兵が憐れで居並ぶ者涙に咽んだのである。

南西諸島特に奄美大島近海にて敵の潜水艦や敵機に撃沈された船舶は富山丸の他封馬丸武州丸等百数十隻と数へ乗船していた軍人軍属船員或は軍の作戦指導により内地に疎開する沖繩や徳之島の予童や島民又内地の軍需工場に徴用された女子挺身隊、入隊する少年航空兵隊等の戦争犠牲者これ等数方の英霊が今この近海の海底に鬼哭歌々と寂しく眠っている。

聖域の森に建立する供養塔はこれ等の英霊が古仁屋近海の海底に安らかに鎮り、我國の平和と繁栄に加護あらんことを祈念し併せて供養塔を介して富山丸の遭難に際し古仁屋町民の救援活動に国防婦人会の負傷者の看護に尽瘁された偉大な功績を後世に伝えるよすがとしたのである。

昭和六十年六月三十日

富山丸生存者

三角光雄

合掌